

P1-029

25人に一人は弱視危険因子を持っている

野末 富男

のぞえ小児科

【序文】

弱視解決には小児科医の協力が不可欠である。視力は1歳で0.2、2歳05、3-5歳1.0と育つ。しかし乱視、遠視（網膜の後方に焦点を結ぶ状態で遠くも近くもピントが合わない）、不同視（右眼と左眼の屈折度数の差が大きい）、斜視といった弱視危険因子があると発達せず弱視になる。弱視は視覚感受性のある時期（＜60ヶ月）に発見され治療されなければ一生視力不良が続くため早期発見早期治療が重要である。1995年眼科医の平井らは、視力検査だけでは弱視を見逃してしまうので眼科医が積極的に介入して全ての子供が早い時期に屈折検査を受けるべきだと報告した（日本眼科紀要1995; 46: 1172-5）。しかしいまだに多くの三歳児健診で屈折検査はなく眼科医もいない。このため手遅れの弱視は後を絶たず生涯視力不良に苦しむ。また小児科医はワクチンもれと発達障害には興味があるが眼には関心がないと眼科医に思われている（第43回日本小児眼科学会、柏井真理子 学校保健の現場と課題）。スポットビジョンスクリーナーは簡単に、数秒で弱視危険因子が判定できる優れた機械で、誰でも使え、取りこぼしがなく、どこでも持ち運べる。

【目的】弱視を早急に見つけ出し弱視危険因子と弱視の頻度を調べる

【対象と方法】

無料で、院内と31箇所の保育園、幼稚園、こども園で4872例にスポットビジョンスクリーナーで検査した。三歳以上の判定基準は群馬医師会のものが小児科医にはわかりやすく使いやすかった（遠視：球面度数+2.0D以上、近視：球面度数-2.0D以上、乱視：円柱度数-2.0D以上、不同視2.0D以上、斜視7°以上）。

【結果】

270人のこども園でも検査は約二時間半で終了した。異常が192例、3.9%に見つかり、98例、2.0%が弱視で眼鏡となった。三歳児健診見逃し例が33人いた。斜視から網膜剥離が一例、測定不能から白内障が一例みつけた。25人に一人が弱視危険因子をもち、50人に一人が弱視であった。西田らも3.8%に異常を認めたと報告している（日本視能訓練士協会誌 2017; 46: 137-46）。

【考案】

弱視は探せば次々とみつかると。視力検査だけの三歳児健診は見逃しが多く意味がない。弱視は今やスポットビジョンスクリーナーのある小児科や一部の自治体でスクリーニングされている。

【結語】

可及的速やかに、全国一律に、三歳児健診に屈折検査が加わるべきである（リース月2万円）。

【文献】野末富男 25人に一人は弱視危険因子を持っている 小児科臨床 in press